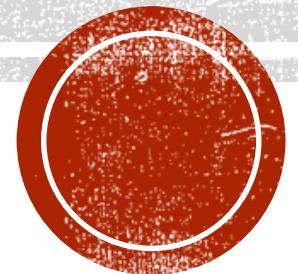


2020年 2月 17日（月） 13:00-17:00

第77回 心身変容技法研究会 於：同志社大学新町キャンパス

変容する死の距離



日高 悠登

龍谷大学世界仏教文化研究センター

自己紹介

- ◆ 高等学校 - 仏教思想、「母難日」
- ◆ 大 学 - 仏教学
- ◆ 大学院 - 教職実践、宗教学、臨床哲学
- ◆ 研究員 - 沖縄県の受託研究など

これまでの研究

◆ 専門：宗教学、死生学、臨床哲学

◎終末期医療研究

- フィールドワーク：ホスピス、ビハーラ
- インタビュー：チャプレン、ビハーラ僧

⇒ 在日外国人をも含めたホスピスの提唱

◎スピリチュアリティ、医療文化など

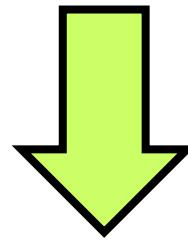
発表内容

- ◆ 看取り、死、哲学について
多様な観点から論じる。

はじめに

- ◆ 古今東西、人々が死への関心が無かった時代など無く、死への挑戦と思想構築の歴史は、主に哲学・宗教において見られてきた。
- ◆ 現在でも、人間が試される最大の事象として死があり続けることは変わらない。

死の研究は人それぞれが背負わなければならない課題であり、一人一人にその解決が求められてもいる。他の研究とは違って、死の研究はその成果を比べるようがない点で特異的である。



死を共通意識として、私たち自身による
死の在り方の追求は、いかにして可能か

日本人の死亡場所・死亡者数

病院死	978,260 (73.0%)
診療所	24,144 (1.8%)
介護老人保健施設	33,105 (2.5%)
助産所	—
老人ホーム	99,910 (7.5%)
自宅死	177,473 (13.2%)
その他	27,505 (2.1%)
計	1,340,397 (前年 1,307,748)

厚生労働省 『平成30年度 厚生統計要覧』

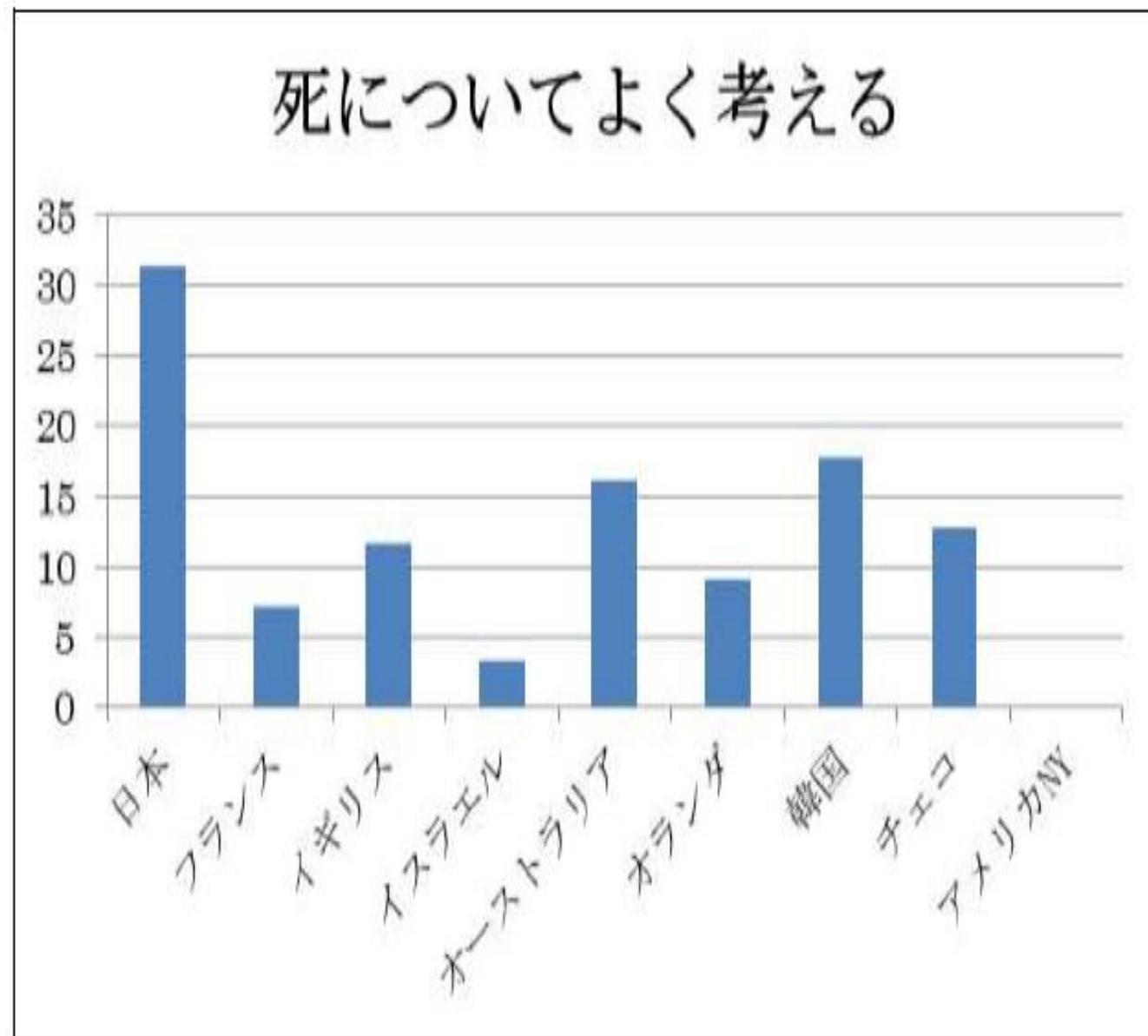
「第1-25表 死亡数・構成割合，死亡場所×年次別」を基に作成

- ◆ 病院死が首位を占めるが、これは場所のみ係る問題ではない。
- ◆ 死亡場所は、日本人の死への向き合い方を具体的に反映した結果とも言える。

辻彼南雄（他）「4. 終末期の介護・医療と看取りに関する国際比較調査」、国際長寿センター『平成23年度 理想の看取りと死に関する国際比較研究（サマリー）』国際長寿センター2012、p. 19より転載

死について考える頻度

日本は死について考える頻度が高い。



どの程度死について考えるか (%) 問4_1

回答者
(医療・福祉従事者)

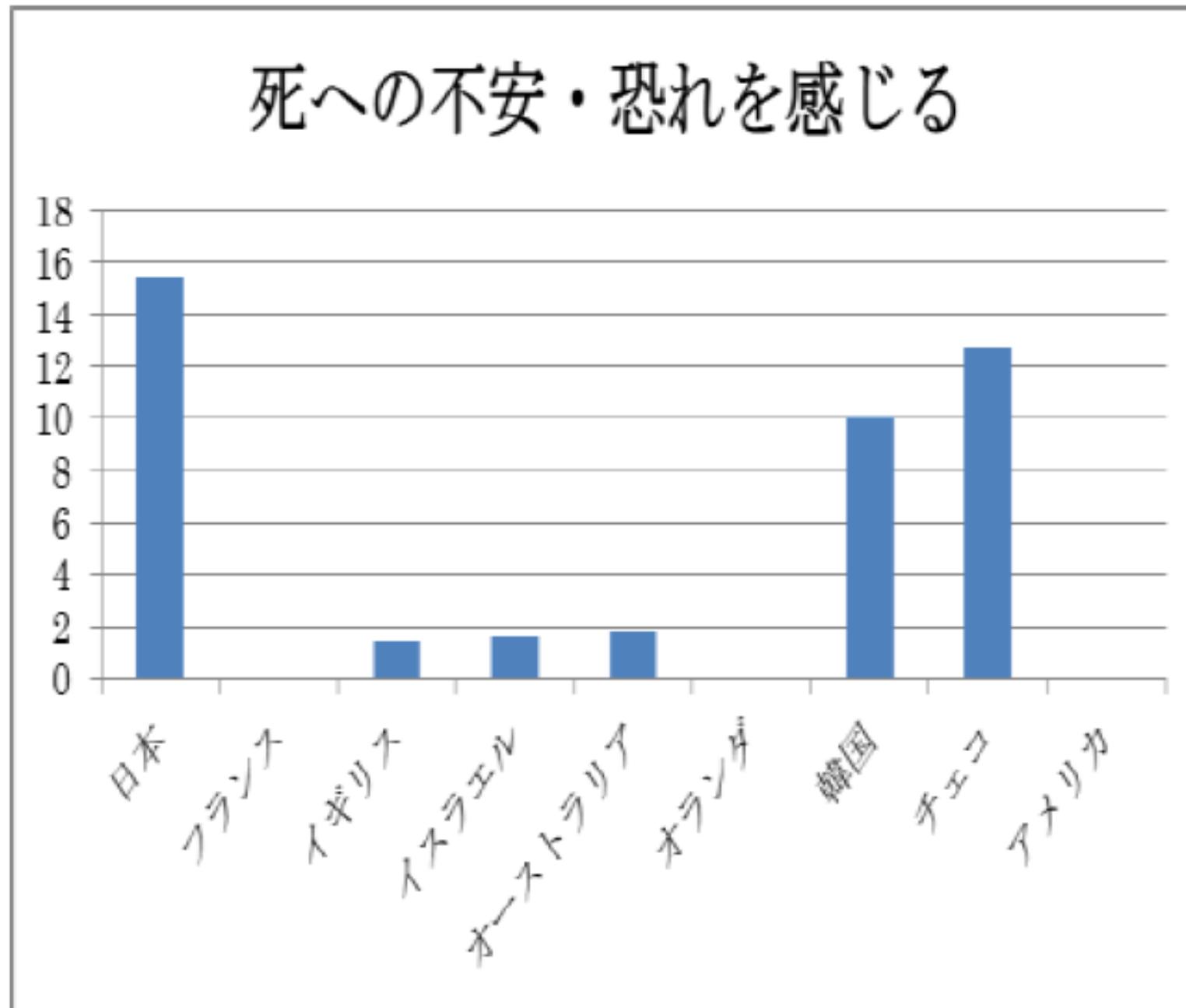
日本 (220名)
韓国 (80名)
フランス (29名)
イギリス (67名)
イスラエル (63名)
オーストラリア (57名)
オランダ (33名)
チェコ (53名)
アメリカNY (30名)

計9ヶ国 計632名

(同報告書、p. 10を基に作成)

死への不安・恐れ

日本は死への不安・恐れを感じる割合が高い。



死への不安・恐れを感じるか (%) 問4_2

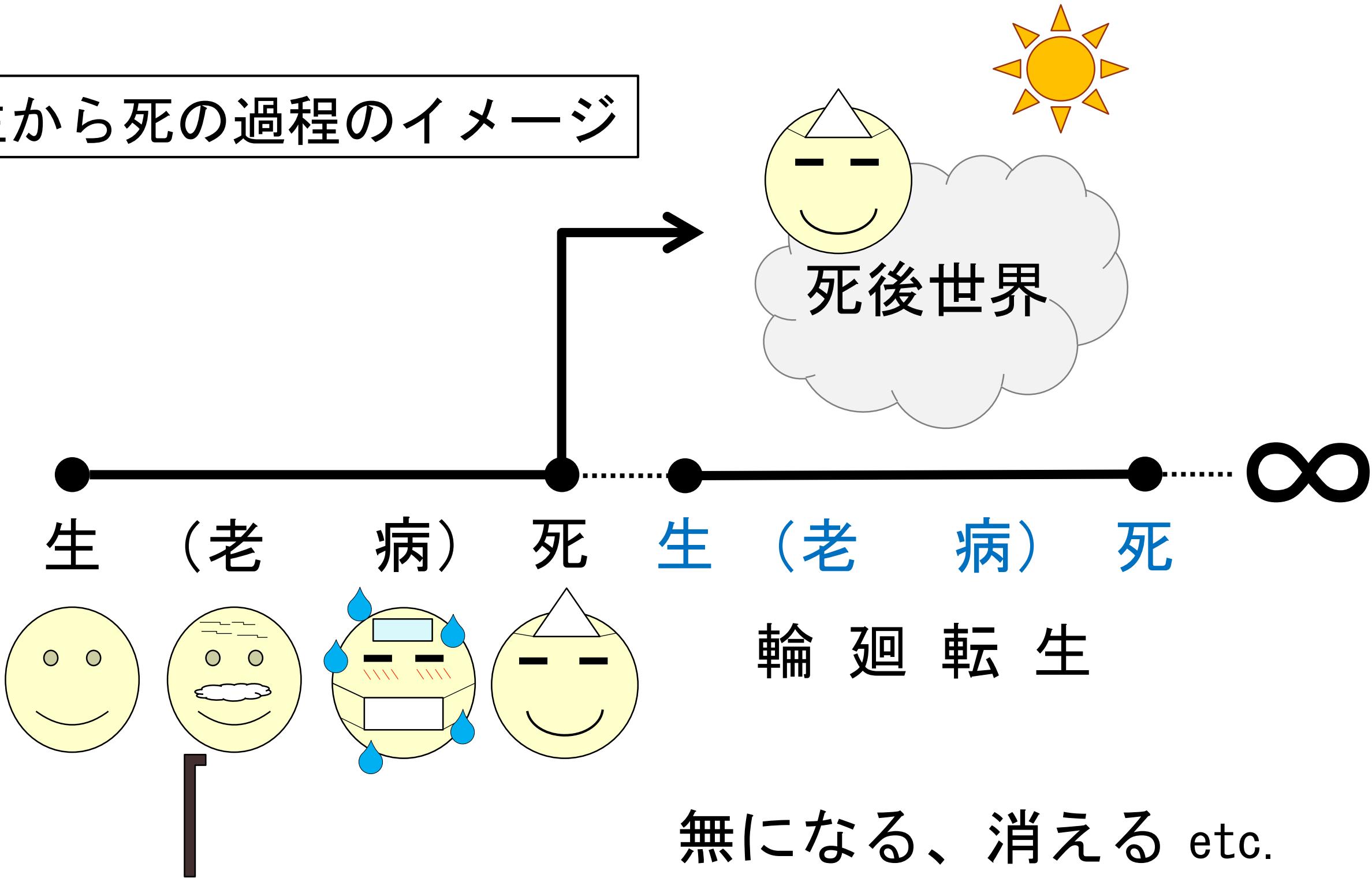
自分の最期を看取ってほしい人

各国とも、「配偶者」「子」が多い傾向は共通している。日本は「宗教者」が少ない。韓国、イギリス、アメリカは「医師」の割合が比較的高い。

自分の最期を看取ってほしい人 (%) 問5_3

	配偶者	両親	子	孫	かかりつけ医	専門医	看護師	介護士	施設職員	友人	近隣住民	宗教者	きょうだい	その他
日本	68.1	15.7	70.8	20.8	10.2	2.8	8.3	5.1	3.7	18.1	3.2	1.9	3.2	9.7
フランス	70.6	11.8	58.8	29.4	5.9	.0	.0	5.9	.0	23.5	.0	5.9	.0	.0
イギリス	80.0	40.0	40.0	10.0	10.0	10.0	10.0	.0	.0	.0	.0	10.0	.0	20.0
イスラエル	83.6	21.3	75.4	32.8	6.6	4.9	4.9	9.8	4.9	18.0	1.6	13.1	1.6	3.3
オーストラリア	85.2	18.5	79.6	35.2	5.6	1.9	5.6	1.9	.0	33.3	.0	13.0	3.7	7.4
オランダ	97.0	39.4	84.8	24.2	.0	.0	6.1	3.0	.0	33.3	.0	.0	9.1	.0
韓国	70.9	2.5	38.0	2.5	19.0	7.6	10.1	11.4	8.9	5.1	.0	17.7	.0	6.3
チェコ	77.4	28.3	75.5	17.0	.0	.0	5.7	.0	.0	17.0	1.9	15.1	.0	5.7
アメリカ NY	100.0	33.3	96.3	14.8	11.1	7.4	3.7	.0	.0	29.6	.0	14.8	.0	.0

生から死の過程のイメージ

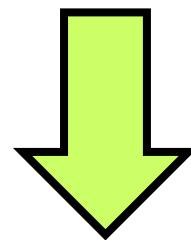


亡くなったものたちとの思い出

- ◆ 「斎藤さん」のエピソード
- ◆ ペットたち

喪失のなかでも、生きものが「死ぬ」ことほど、鮮明に自覚させられることはない。〔中略〕「いのち」とは、本来そのような一回性を帯びた有限のものであろう。〔中略〕死の有限性を超えようとし、その対極に、たましいの不滅、天国、浄土、常世などのイメージが生まれたのかもしれない。失われたいのちがもう帰らないからこそ、たましいの蘇りや、死者のたましいと再開するなど、多くのもの語りが生まれてきたともいえよう。

現世は、生者たちは、独力で存立しているのではない。無量無数の死者たちこそ、事物や行為を名づけ、意味分節体制をつくり出し、民族の歴史や民俗を基礎づけ、法律や宗教の起源を教えているのだ。[中略] 死者たちは、生者たちという胎児を活かしめしている胎盤にほかならない。



私たちは、大多数の死者たちが創った世界に生きている。それゆえ、死者を抜きにした世界を語れない。死者への敬意・弔意を示す時、それは世界そのものに対して、同様の行為を行なっていることになる。

しかし、その一方で

私たちは〈Virtual Danse Macabre〉
（仮想的な死の舞踏）と言うべき、複雑な事情を
含んだ死の情報群と密着しながら生きている。

日高2018b:30

臨終行儀

田宮1995:37

仏教思想を基盤に、死に臨んだ（臨終）人の心得と、看取りの作法（行儀）と、それが行われる場について示したものの。

- ①「無常院」という別所を作り、病者を安置する。
- ②無常院には金箔の仏像を置き、西方に向ける（仏像の向きは逆でもよい。その場合、病者の前）。
- ③像の右手を挙げ、左手には五綵の幡。幡の足は垂れて、地に曳くようにする。
- ④病者を像の後ろにあって、左手に幡の足を取り、仏を通して浄土の想をなす。
- ⑤看護する者は、香を焚き華を散らして病者を荘厳し、屎尿・吐唾があれば、随時これを取り除く。

日高2018a:78-79

臨終行儀とは、精神的・宗教的豊かさの象徴としての看取りであった。

小林保治；増古和子校注・訳『宇治拾遺物語』
(新編日本古典文学全集50) 小学館1996、pp. 415-417

『宇治拾遺物語』 (卷第十三)

「九 念仏の僧が魔往生する事」

昔、美濃国伊吹山に久しく修行をしている聖がいた。阿弥陀仏よりほかのことは知らず、ただひたすら念仏を唱えて年を送っていた。深夜に仏の御前で念仏を唱えていると、虚空に声がして告げて言う、「なんじは、ねんごろにわれを頼みとしている。今は念仏の数も多く積ったゆえ、明日の午後二時に必ず必ずやって来ておまえを迎えよう。ゆめゆめ念仏を怠るまいぞ」と。聖はその声を聞いて、このうえもなく熱心に念仏を唱えて、水を浴び、香をたき、花をまいて、弟子も念仏をとともに唱えさせて西に向って坐っていた。

(続き)

そのうち次第にきらめくような物が見えてきた。手をすって念仏を唱えながら見ると、仏の御身から金色の光を放って、こちらへ射し込んでいる。秋の月が雲間から現れ出たようである。さまざまの花を降らし、仏の眉間の白毫の光が聖の身を照らしている。この時、聖は尻を立てて拝み伏した。数珠の緒も切れてしまいそうだ。観音菩薩が蓮華の台座をさしあげて聖の前にお寄りになると、紫雲が厚くたなびき、聖は這い寄って蓮台に乗った。そして西の方へ去って行かれた。坊舎に残った弟子たちは泣く泣く尊んで聖の後世をとぶらった。こうして七、八日過ぎてから、坊の下役の法師どもが、「念仏の僧に湯を沸かして浴びてもらおう」と、木を伐りに奥山に入ったところ、はるか向こうの滝におおいかぶさるように茂っている杉の木がある。その木の梢で叫ぶ声がした。不思議に思っで見上げると、法師を裸にして梢にしばりつけてある。

(続き)

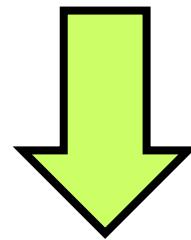
木登りのうまい法師が登って見ると、極楽へお迎えいただいたはずのわが師の聖がつる草でしばりつけられている。この法師が、「どうしてわが師は、こんな目に遭っておられるのです」と、そばへ寄って縄をほどくと、聖は、「『今すぐ迎えに来るぞ。その間しばらくこうしていよ』と仏が言い残しておいでになったのに、なぜにこうしてほどくのだ」と言った。それを無視して近寄ってほどくと、「阿弥陀仏、わしを殺す者がいる。おうおう」と叫んだ。しかし法師どもが大勢登って解いて下ろし、坊舎へ連れて帰った。弟子たちは「情けないことだ」と嘆き合った。聖は正気もないままに、二、三日ばかりして死んでしまった。**智恵のない聖は、こうして天狗にだまされたのである。**

死の距離との取り方は、いつの時代でも難しい

アルフォンソ・リンギスの思想から
死の距離を紐解く

リンギスの著書

The Community of those who have nothing in common
(邦訳『何も共有していない者たちの共同体』)



“自分と無関係な人間はいない” という思想

共同体は、人が自分自身を裸の者、困窮した者、浮浪者、死にゆく者に曝す時、形成される。人は、自分自身と自分の力を肯定することによってではなく、労力の損失、または犠牲に、自らを曝すことによって共同体に入るのである。共同体は、人が自分自身を他者に、自分自身の外にある力と力に、死と死にゆく他者に曝す動きの中で形成される。

(ibid., p. 12)

リンギスは共同体を2種類から捉え直す

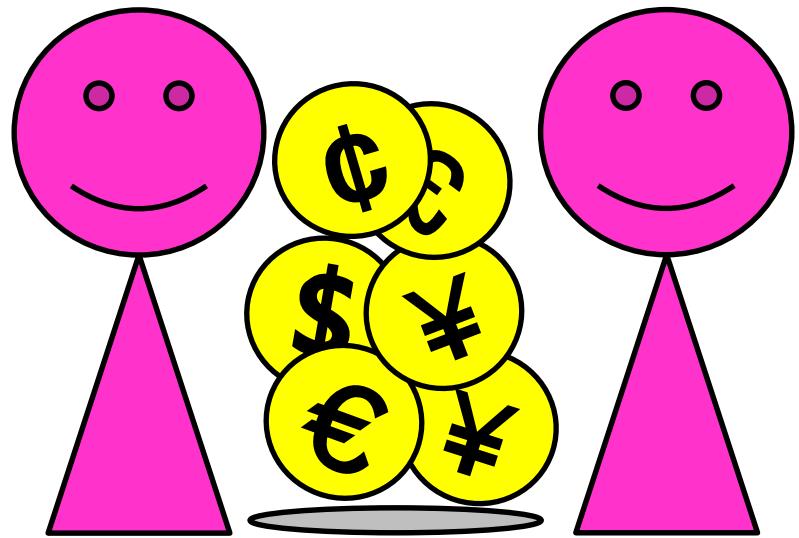
合理的共同体

もう一つの共同体

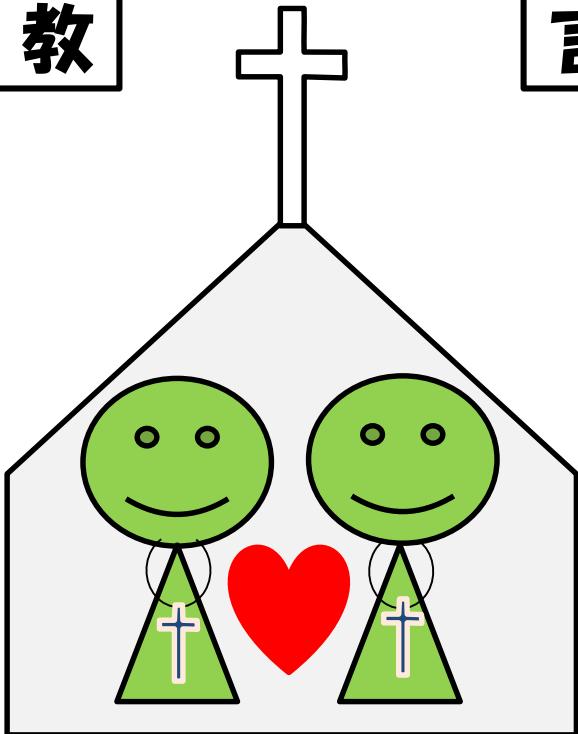
リングスは、病院において死にゆく者に付き添う者の必要性を考え続けてゆく中から共同体を問い直し、どのような場所であれ、死にゆく者を見捨てるような社会は成り立たないと考え、人種・言語・宗教・経済と共有関係にある者に対し、何も共有していない人々の死が、私たちと関係していることを唱えた。 (pp. IX-X.)

合理的共同体のイメージ①

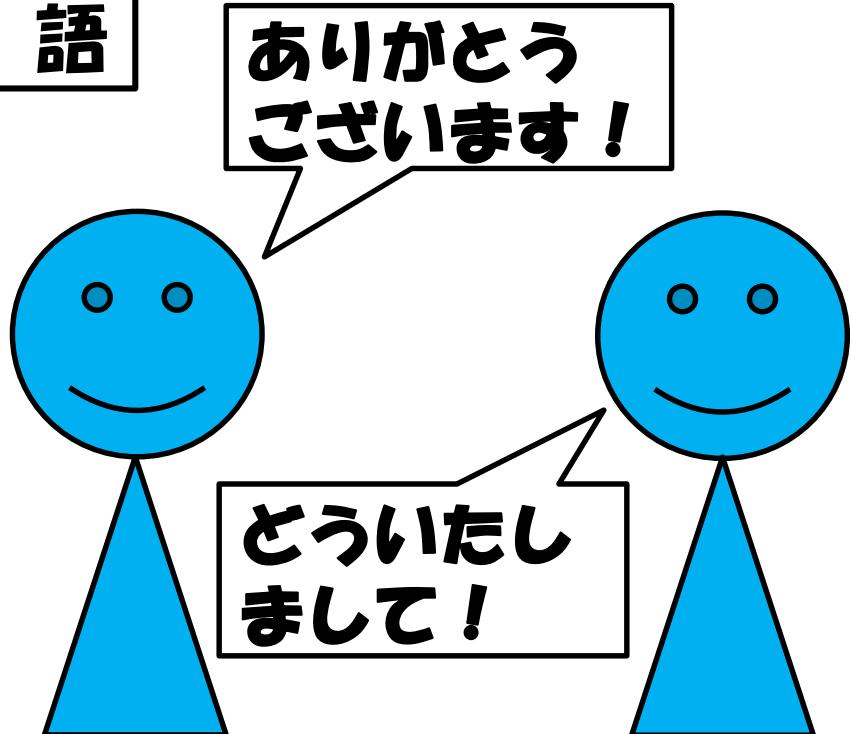
経済



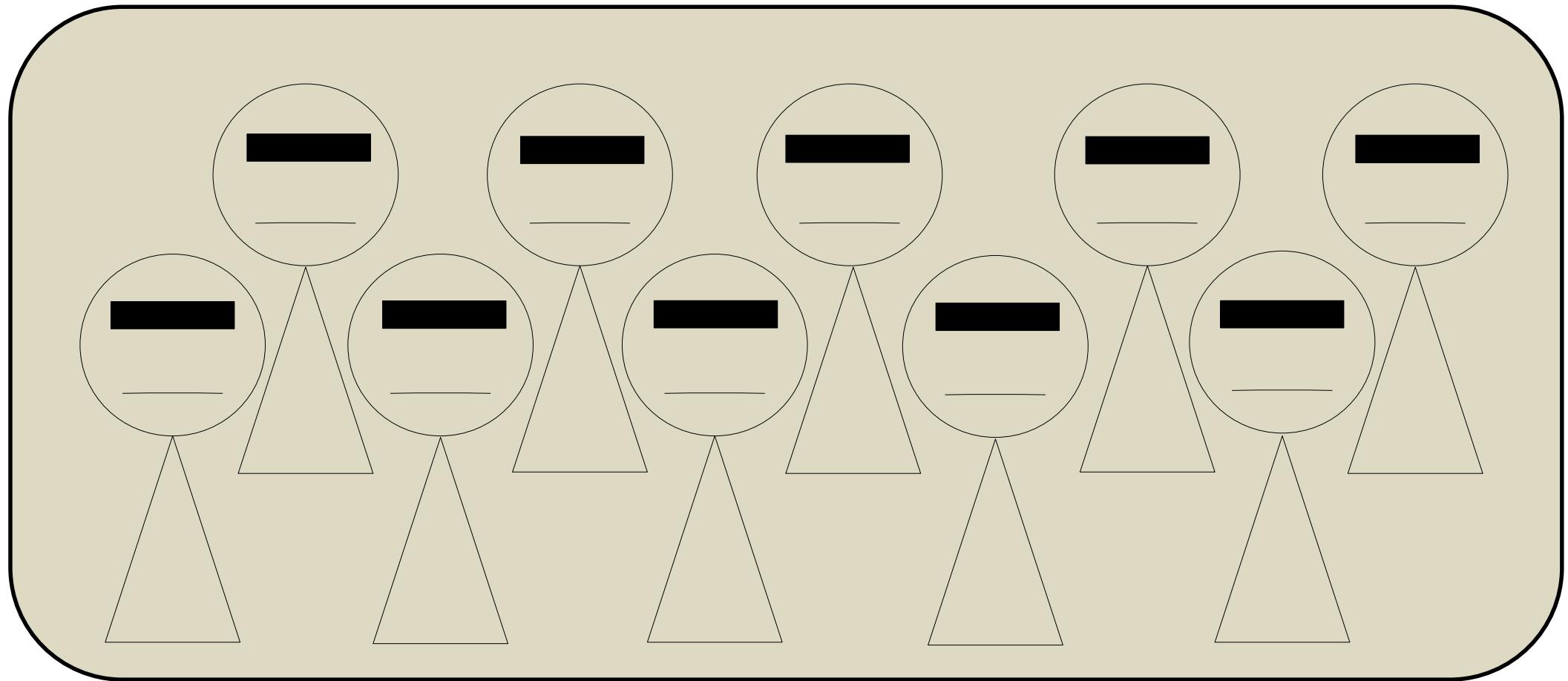
宗教



言語



合理的共同体のイメージ②



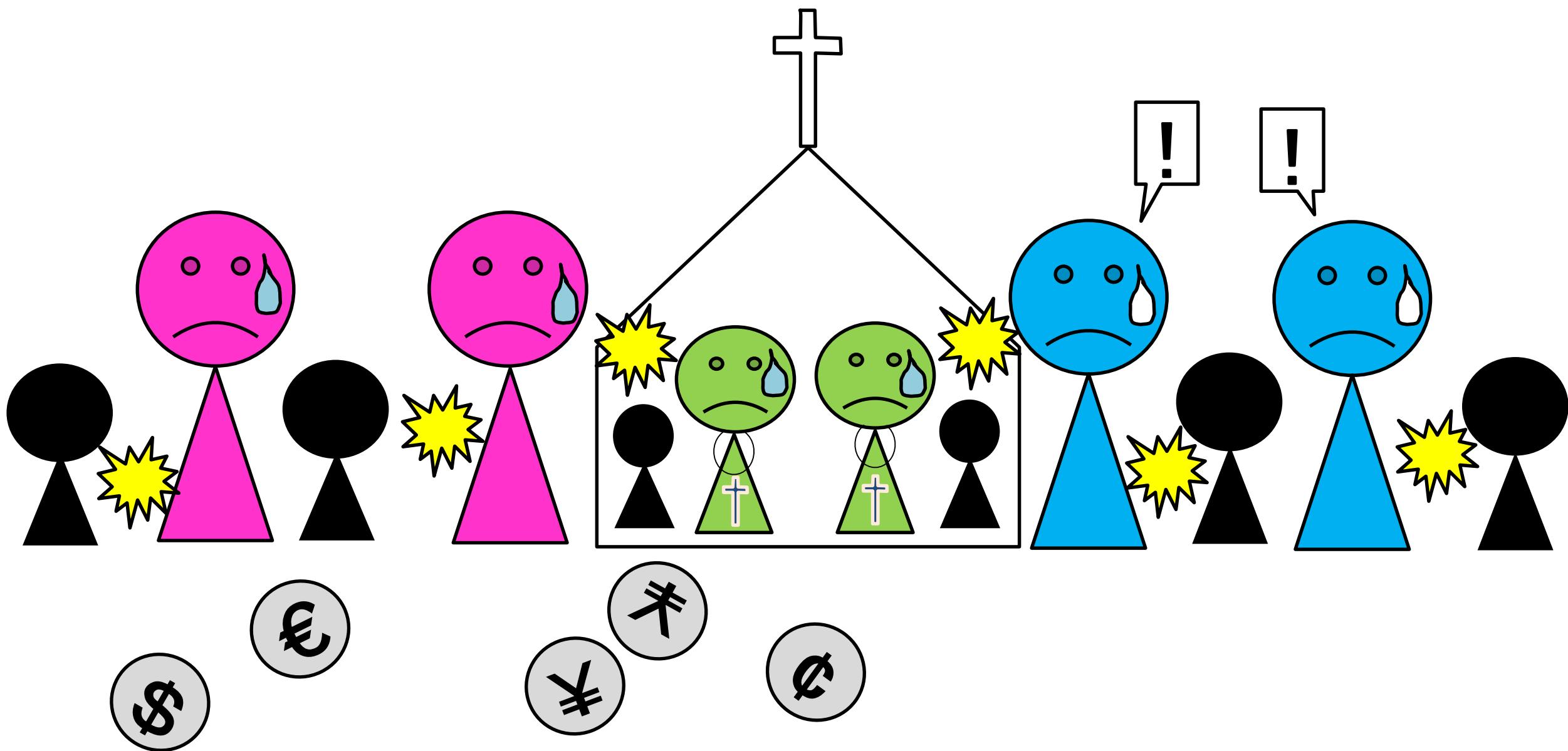
「合理的共同体」では「一人一人の平静な精神が、共通の論説の代表でしかなく、一人一人の努力と情熱は企ての中に吸収されて、非人格化される」 (ibid., p. 10)

もう一つの共同体

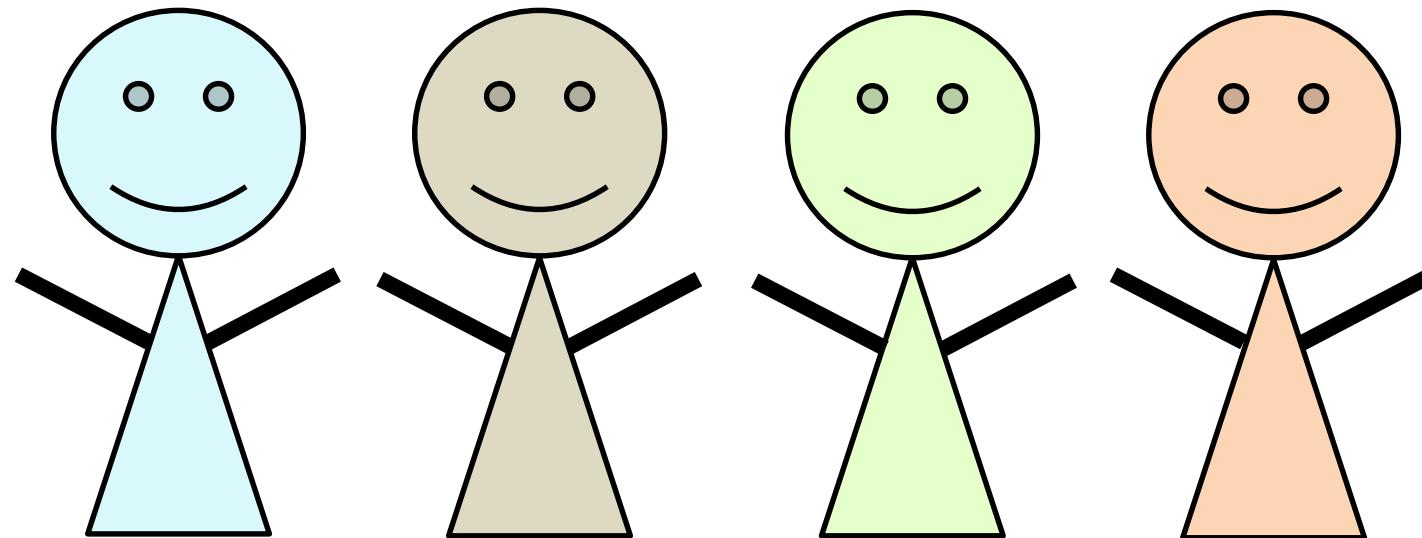
その共同体（もう一つの共同体）は、自分の共同体のアイデンティティを持ち、自分の性質を生み出す者を自分と何も共有していない者、見知らぬ者へ自分自身を曝すことを求める共同体である。／もう一つの共同体は、単に合理的共同体に吸収されるものではない。それは繰り返し合理的共同体の生き写しとして、または、その影として合理的共同体を悩ませる。

(ibid., p. 10.)

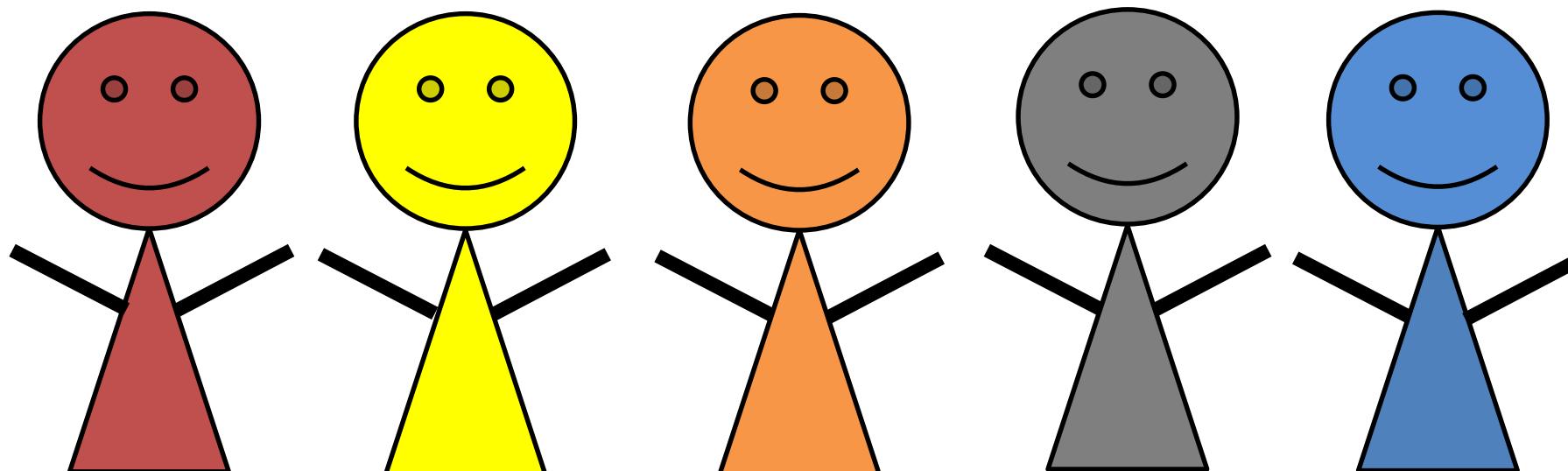
もう一つの共同体のイメージ①



もう一つの共同体のイメージ②



実は、私はこういう者



何かを言わなければならないという、言葉の恐ろしい重みにくじかれて、死にゆく者のベッドサイドに赴かない者たちがいる。彼らには、無言のまま、すでに他者と共に死と沈黙の領域へ、連れ去られたかのように思えている。だが、もしあなたが、どうにかして行く勇気を出したならば、そこにいて、何かを言わなければならないことを確信する。絶対に必要なのは、あなたがそこにいて話すことである。あなたが言うことは、結局のところ、ほとんど問題ではない。あなたは何かを言ってしまおう——「きっと大丈夫だよ、母さん」——あなたは、こんなことを言うことは愚かなことであり、彼女の知性に対する侮辱でさえあることも知っている。

(ibid., pp. 108-109.)

(続き)

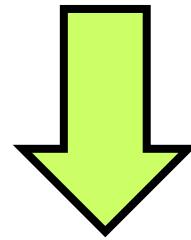
それは、彼女が自分が死に向かっていることを知っており、あなたよりも勇敢だからである。結局、何を言うかは大して重要なことではない。何を成すべきであったか。それは、あなたが何かを言う、ということだけだったのである。あなたの手と声が、彼女が漂っているどことも知れぬ場所に付き添って伸び、その声の温もりと声色が、彼女の息が途切れる時に、彼女の場所へ届くこと。そして、あなたの目の光が、見るものが何もない所に向ける彼女の目と出会うことである。

(ibid., pp. 108–109.)

合理的共同体では、他の状況が正常とされている。言われているということが本質的であり、言うということが非本質的であり、必要なのは誰が言うにしても、その人がこのことを言うということである。

(*ibid.*, p. 109.)

自分に酷似したアンドロイドでも、
自分のクローンでも、
他の誰でもなく、
自分自身でなければならない



個としての人間の在り方を強調

社会形態には、家族性という実際の認識を越えた何か別のものがある。つまり、所有したり、生み出すことを何も共有していない者たちの、彼らの死ぬべき運命において個々に欠けている親交である。それは見識、命令、資産の交換ではなく、異なる個人同士の生の交換において現実のものとなる。人は他者の為に開いている死の場所に自身を完全に置く時、その他者の同胞となる。

(ibid., p. 157)

(続き)

家族性を越えた、この**死の共同体**を見付ける為には、私
たちは家族性から極限にまで離れた状況において、自身
を見つけ出すか、自身の想像力により自らを置かなけれ
ばならない。

例えば、

自国が戦争をしている国の中に、
自分が信仰できない、または自分を排除する宗教で結ば
れている外国人たちの間に、
自分と生産的・商的取引が一切無い、
自分に何の借りも無い、
自分の言語を一語も理解してくれない、
自分と年齢がかけ離れた人（同年齢の集団でさえも一つ
の拘束である）

と共にいるという状況に、自身を見つけ出すのである。

(ibid., pp. 157-158.)

リングスは他者との出会いにより、
共同体の脱構築を模索してきた

Lingis, Alphonso., *Dangerous emotions*(2000), p. 185.

死にゆく者との付き合いを許されるということは、
私たち自身の誠実さ、私たちの健康、社会、そして
勇気を危険に晒すことである。死にゆく者に付き添
う機会を与えられているということは、最も情熱的
で、最も贅沢な贈り物が与えられているということ
である。

おわりに

- ◆ 死は、生きとし生けるものに出会い、自らも経験していかなければならない事象
- ◆ 死に対する経験と意識の差が、死の距離の変容を引き起こしていく

ご清聴ありがとうございました！

安芸都司雄『死の体験 自己の他者性を生きる』世界書院2000

神居文彰「第二章 「臨終行儀」の系譜と本書収録資料の解題 第一節 日本仏教における「臨終行儀」の系譜」、神居文彰；田宮仁；藤腹明子；長谷川匡俊『臨終行儀 ―日本的ターミナル・ケアの原点―』北辰堂1995、pp. 41-76

厚生労働省『平成30年度 厚生統計要覧』 「第1-25表 死亡数・構成割合，死亡場所×年次別」

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/youran/data30k/125.xls> (2020年2月12日閲覧)

小林保治；増古和子校注・訳『宇治拾遺物語』（新編日本古典文学全集50）小学館1996

田宮仁「第一章 仏教とターミナル・ケア 第三節 仏教とターミナル・ケア」、神居（他）、前掲書1995、pp. 31-38

辻彼南雄・渡辺大輔・中島民恵子「4. 終末期の介護・医療と看取りに関する国際比較調査」、国際長寿センター『平成23年度 理想の看取りと死に関する国際比較研究（サマリー）』国際長寿センター2012

http://www.ilc-japan.org/study/doc/summary_1101.pdf (2020年2月15日閲覧)

日高悠登『わが国における看取りへの視座 ―宗教者によるケアの臨床哲学的探求から―』、大阪大学大学院文学研究科博士論文、2018.3 (2018a)

———— 「看取りとは何か」 『メタフュシカ』 (49)、2018.12、pp.29-41 (2018b)

やまだようこ「喪失のもの語りとスピリチュアリティ」鎌田東二企画・編；山本竜隆（他）執筆『スピリチュアリティと医療・健康』ビイング・ネット・プレス2014（地球人選書 講座スピリチュアル学；第2巻）、pp.156-177

Lingis, Alphonso., *The community of those who have nothing in common: studies in continental thought*, Bloomington: Indiana University Press, 1994.

—————., *Dangerous emotions*, Berkley: University of California Press, 2000.

渡辺哲夫『死と狂気』筑摩書房2002